

は特筆すべき事である。一體植物分類學者には、各科各屬につき得手、不得手のある様に思われるが、そして無論フランセー氏の初期の仕事の一部を批判するので、決して普偏化すべきものではないが、アザミ屬の様な變異の大きく且つ標品には特徴の少ない群では東亞を採集せるマクシモヴィーチ氏の仕事に比すると妥當性が少ないと思ふ、フランセー氏の *Enumeratio Plantarum Japonicarum* を最後の幕として、日本植物研究は日本で行はれる事になり、東京帝國大學小石川植物園が其の舞臺となつて偉い方々の輩出となる。フランセー氏の百年目をむかへ、日本に植物學を起し、且つ發展せしめられた諸大先生の大恩を今更ながら深く感んずる次第である。

羊 齒 植 物 雜 錄 2.

田 川 基 二

9) *Asplenium Fauriei* CHRIST と **イエジマチャセンシダ**。

先頃、宇治山田市の伊藤武夫氏から、*Asplenium Fauriei* CHRIST イエジマチャセンシダなるものが臺灣に實在するかどうかといふ質問を受けて調査した結果、意外な事實を發見した。此の *Asplenium Fauriei* CHRIST なるものは 1899 年の發表で、CHRIST 氏の原記載によれば、基準標本は FAURIE 氏の No. 1481、産地は Huki で、1898 年 (明治 31 年) 6 月 16 日の採集といふことになつてゐる。其後明治 44 年、中井博士は植物學雜誌第 25 卷第 319 頁の雜錄欄に於て、琉球の西北に續ける一小島伊江島で田代安定氏の採集せるヒメチャセンシダ類似の一品イエジマチャセンシダは *A. Fauriei* Christ に外ならずとなし、且つ Huki を臺灣の西北角富貴と解釋せられてゐる。翌大正元年には兒玉親輔氏が松村博士監修の新撰植物圖編第 1 編第 3 集第 45 圖版に於て伊江島産の標本の圖及び羅和兩文の記載文を發表せられ、その産地は臺灣富貴及び琉球伊江島となつてゐて、爾來今日に至るまで此の説が踏襲されてきた。

所が、當教室所藏の FAURIE 氏の No. 1481 を見るに、之は ***Asplenium oligophlebium* BAKER** ヒメチャセンシダに外ならず、産地は氏一流の字體で Ibuki と手書してある。氏は 1898 年には日光、富士、伊吹の諸山に採集してをり、且つ第一回の臺灣採集旅行は 1903 年 (明治 36 年) のことであるから、江州伊吹山であることには疑ふ餘地がない。氏一流の筆記體の文字が CHRIST 氏を感し、I と b とが合して H となり、Ibuki が Huki に、更に富貴になつたわけである。そこで當然 *Asplenium Fauriei* CHRIST は *Asplenium oligophlebium* BAKER ヒメチャセンシダの異名とな

り、臺灣の朦朧羊齒が一種姿を消し、伊江島のイエジマチャセンシダには學名がなくなるが、ヒメチャセンシダと同種とは思はれないから、新に學名を *Asplenium iezimaense* TAGAWA とすることにした。

ヒメチャセンシダは九州では稀品なのか、私の知つてゐる範圍では肥前國三船山、筑後國高良山及び大隅國屋久島の三ヶ所だけである。

10) *Dryopteris patens* O. KUNTZE **パテンシダ**とは何か。

本種が本邦に産することを最初に報告した人は CHRIST 氏で、1901 年のことである。材料は 1900 年に FAURIE 氏が奄美大島で採集した No. 4541 である。續て 1904 年には同く FAURIE 氏が 1903 年に臺灣の淡水で採集した No. 697 も本種であると發表し、同年臺北で採集した No. 645 は特に *Aspidium patens* var. *pilosum* CHRIST **ケパテンシダ**といふ新變種にしてゐる。上記三個の標本は皆當教室の標本室に保存してあるが、何れも *Dryopteris parasitica* O. KUNTZE **ケホシダ**に外ならぬ。従てパテンシダ、ケパテンシダといふ非常識極る和名はケホシダの異名となり *Dryopteris patens* O. Kuntze は我邦の Flora から除くべきである。

11) *Dryopteris oshimensis* C. CHR.

本種も亦 CHRIST 氏の新種で、元の學名は *Aspidium oshimense* CHRIST. 1901 年に發表されたもの、基準標本は FAURIE 氏が 1900 年 7 月に奄美大島で採集した No. 4552 である。後 CHRISTENSEN 氏により *Dryopteris* に移され、上記の學名を得たが、之も當教室所藏の副標本を見ると *Dryopteris acuminata* NAKAI **ホシダ**そのものである。

CHRIST 氏は FAURIE 氏の採集品を材料にして日本の羊齒類を研究し、かなりの貢獻もしたが、自ら醸した混雜の爲に結局相殺されるであらう。

12) 屋久島の *Asplenium lunulatum* Sw.

Asplenium lunulatum Sw. と云ふ一羊齒が CHRIST 氏によつて 1901 年に屋久島から報告されてゐるが、其の根據となつた FAURIE 氏採集の No. 4508 を見ると、正に *Asplenium normale* DON **ヌリトラノヲ**であつて、唯々發育がよくて羽片の大きなものの標本にすぎぬ。*Asplenium lunulatum* Sw. は廣く熱帶地方に分布し、ヌリトラノヲに似てはゐるが、葉柄や羽軸の色、葉質、葉脈や囊堆の模様を異にするものである。

13) *Dryopteris Boryana* C. CHR. は日本に産しない。

CHRIST 氏は又 1896 年に、FAURIE 氏が Ozaka (大阪か? 1893 年のことであるか

Sept. 1933.

219

ら東北地方の何處かかもしれない)で採集した No. 12058 をヒマラヤ産の *Nephrodium Boryanum* BAKER にあてて、本種が我邦にも産することを報告してゐるが、之も大な誤で、この No. 12058 は *Athyrium viridifrons* MAKINO f. *Okuboanum* MAKINO オホヒメワラビである。*Nephrodium Boryanum* BAKER は羽片や小羽片の中肋、細脈及び羽軸などに毛があつたり、小羽片の裂片に鋸齒があつたりして、オホヒメワラビよりは寧ろヒメワラビを想像する方が當を得てゐるかもしれない。

此のことに就ては、既に 1924 年に小泉博士が植物學雜誌第 38 卷第 112 頁に注意せられてゐるにも拘らず、日本植物總覽には不注意にも *Dryopteris Boryana* C. CHR. として、而も産地を四國として舊版新版共に記載してゐる。

抄 録

堀川芳雄：—日本産苔類の研究第八編 Y. HORIKAWA: Studies on the Hepaticae of Japan. VIII. in Journ. Sc. Hiroshima Univ. ser. B, div. 2. Vol. I (1933). Art. 14.

我邦苔類の研究に精進せられつゝある堀川氏の論文第八編であつて、本編には次の 9 種の記載及びその圖が發表せられてゐる。

Riccardia blasioides HORIKAWA, sp. nov. 安藝國八幡村及び廣島市附近、肥後國南關。

Riccardia submersa HORIKAWA, sp. nov. 肥後國南關。

Radula brunnea STEPHANI 甲斐國駒ヶ嶽、信濃國御嶽。

Leucolejeunea planifolia HORIKAWA, sp. nov. 安藝國宮島。

Lopholejeunea nipponica HORIKAWA, sp. nov. 紀伊國那智山。

Drepanolejeunea asymmetrica HORIKAWA, sp. nov. 紀伊國那智山。

D. serrulata HORIKAWA, sp. nov. 紀伊國那智山。

D. japonica HORIKAWA, sp. nov. 安藝國宮島、紀伊國那智山。

Leptocolea pseudogoebelii HORIKAWA, sp. nov. 伊勢國御在所山、安藝國タケダ山
今までに邦人の手による精細な研究のない日本の苔類フロラからは、珍種奇品が今後續々發見されることであらう。

(田川基二)

平塚直秀：—日光及び其近郊に産する「メラムブソラ」科の種類に就て
(鳥取農學會報第 4 卷第 3 號第 143—155 頁、昭和 8 年 6 月)